

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-229	14-045	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Reduced risk of Parkinson's disease associated with lower body mass index and heavy leisure-time physical activity. 低いBMIと余暇での激しい身体活動がパーキンソン病発症リスクを軽減する		
執筆者		
Sääksjärvi K, Knekt P, Männistö S, Lyytinen J, Jääskeläinen T, Kanerva N, Heliövaara M.		
掲載誌		
Eur J Epidemiol. 2014 Apr;29(4):285-92. doi: 10.1007/s10654-014-9887-2.		
キーワード		PMID
パーキンソン病、余暇運動、喫煙、アルコール摂取、BMI		24633681
要 旨		
<p>目的： パーキンソン病の危険因子は確立していない。そこで様々な生活要因がパーキンソン病の発症を予測するかについて検討した。</p> <p>方法： 検討にはフィンランドで 1973～1976 年に実施された Finnish Mobile Clinic Health Examination Survey コホートをを用いた。コホート参加者のうちパーキンソン病のかかっていない 50 歳から 79 歳の男女 6,715 人を対象とした。すべての参加者は、基本検診(身長及び体重測定を含む)、余暇での身体活動、喫煙及びアルコール摂取についての問診に回答した。</p> <p>結果： 22 年間の追跡期間中に 101 人が、パーキンソン病を発症した。年齢、性別、教育歴、community density、職業、コーヒー摂取量、BMI、余暇の身体活動、喫煙及びアルコール摂取量を独立変数とした Cox 比例ハザードモデルを用いて解析を行った。BMI はパーキンソン病発症のリスクと関連は見られなかったが、最初の 15 年間のフォローアップを除くと BMI が高いことがパーキンソン病のリスクとなった(P=0.02)。さらに、余暇の激しい身体活動を行っている者は、そうでない者と比較してパーキンソン病の発症リスクが低下した[相対リスク(RR)0.27, 95%信頼区間(CI)0.08-0.90]。他の慢性疾患における知見とは逆で、現在喫煙者は、非喫煙者とよりパーキンソン病の発症リスクは低かった(RR 0.23, 95%CI 0.08-0.67)。適度なアルコール摂取(1日あたり 5g 以下)者は、非飲酒者と比較して、パーキンソン病の発症リスクが上昇した。</p> <p>結論： この結果は、様々な生活要因がパーキンソン病の発生の予測因子であるという仮説を支持しているが、さらなる研究の必要がある。</p>		